表紙の〝人〟

Mr.フィギュア

今月の一言

傘が、ある

今月の表紙は、そろそろ鍋の季節だからというわけでもないが、旅先のアイスランドにて急な雨に見舞われ、身も知らない茸の傘に入れていただき雨宿りしてるMr.フィギュア。昨今の異常な集中豪雨ではこんなきのこの傘など吹っ飛んでしまうだろうが。

さて先日、孫から面白い質問投げかけられた。「おパパ！（小生はいつからかこう呼ばれている）、きのこの山とたけのこの里、どちらが食べたい？」。うーん、形は違うが同じような味だし、何となくきのこの山かな？　孫たちも全員がきのこの山であった。理由は見た目の可愛さか、食感か？　そんなことを比較する発想が実に斬新で、彼らには時々学ばせていただく。実は、きのこの山、1970年の試作から発売まで5年かかったという。ネーミング、パッケージなど当時としては型破りだったアイデアは40年以上経った今でも色褪せていない。一度食べ比べてみてはいかがですか？

さて傘で思い浮かぶ歌はやはり陽水の「傘がない」。彼女に会いに行くのに傘がないのが問題なのだが、今なら、コンビニでビニール傘も簡単に買えるので、この名曲も生まれなかったかもしれない。他にも雨にまつわる歌は六文銭の「雨が空から降れば」、拓郎の「ある雨の日の情景」（フォーク時代に青春を過ごした偏ったセレクトで失礼！）。しかし何と言ってもこの歌は外せない。その通り、ピンポン！　森進一のおふくろさんだ。「雨が降る日は傘になり」と母親の子供への絶対的な愛を歌う。そして「いつかは世の中の傘になれ」と教えている。昨今は親子の愛も薄れ、傘にならない無責任な親が多い。まるでちょっとの風で裏返るような（カサ、ブラン化？）柔な使い捨て傘では、今の子供たちを守れないのかもしれない。親も傘も権威が低下したものだ。嗚呼、アンブレラ～。

ところで、よく珍しいことをすると「雨が降る」なんて言いますが、雨の日は特別かというと、実は東京では年間106日も雨が降り、なんと秋田県では177日と3日に1日は降っている計算。日本は世界一の傘市場であるといわれる。もともと江戸時代に日常生活に定着した傘だが、今では人口に近い数が出荷されている。それほど日本人は「傘好き」なのだ。確かにヨーロッパの人など雨に無頓着で傘を持ちませんよね。それにしても、最近、巷では傘に他人を入れるというシーンが減った気がします。理由は傘が小さくなった、他人と関わりたくないなど、いろいろありますが、確かに傘に入れると自分が半分濡れる、つまり傘を持ち歩いている人が圧倒的に損をすることは間違いない。情より損得、分かち合うより個人主義の世知辛い時流なのか？　嗚呼、青春の憧れ「相合傘」もそろそろ死語になるのか…。

最後に、「傘」には「傘下」という言葉が示すように、多くの人が身を寄せることのできるものという意味もあります。漢字をよくみてみると「人」が仲良く4人身を寄せてますよね。昨今、核抑止理論の「核の傘」が騒がれていますが、それはさておき、あのおふくろさんの歌のように、これからは家族や世の中の強い傘になり、80歳の傘寿をピチピチジャブジャブ元気に迎えたいものである。さあ、もっとフレーフレー！

P.S　大喜利コンテスト開催中！　詳しくはMr.フィギュアで検索してね。

Mr.フィギュア　本誌の表紙に登場した一見あやしい、どこか可愛い、中年男性。愛犬チャーチルとはいつも一緒。その正体は、実在するビジネスマン恒川憲一氏をモデルに作られたフィギュア。月刊正論の表紙とこのコラムで、厳しく優しく、ダジャレをオシャレに織り交ぜた温かいメッセージを、読者のみなさまに届けている。

恒川憲一氏　つねかわ・けんいち　クリエイター。株式会社シーエムバー代表取締役社長。大阪芸術大学デザイン科を卒業後、広告代理店勤務を経て独立。15年間、絶えずフィギュアを持ち歩き撮影し、ダジャレを考えている。このコラムの真の執筆者。著書に『フォット、一息』（セルバ出版）。